

令和 2 年 7 月 13 日現在

機関番号：34319
 研究種目：基盤研究(A)（一般）
 研究期間：2017～2019
 課題番号：17H00910
 研究課題名（和文）「大学の劇場」による「ラボラトリー機能」の構築 芸術系大学の実践的研究モデル
 研究課題名（英文）On the Laboratory-function: Modeling the University-Theatre Joint for Creation Process of Performing Arts
 研究代表者
 天野 文雄（AMANO, Fumio）
 京都造形芸術大学・舞台芸術研究センター・教授
 研究者番号：90201293
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 31,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、舞台芸術作品の創造における「ラボラトリー機能」の構築とそのモデル化を目的として実施された。「ラボラトリー機能」とは、「作品の創造・発信」に必要な研究・実験等の「創造のプロセス」の総体を指す。京都芸術劇場を活用したさまざまなタイプの「劇場実験」が、多くの国内外のアーティスト、研究者の参加のもとで実施され、それらを通じて、芸術系大学が「創造の現場」に実践的に関わる研究モデルの有効性が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

《学術的意義》 舞台芸術研究における「ラボラトリー機能」という新たな研究対象を、理論的・実践的に基礎付けることによって、芸術系大学における作品創造を前提とした「研究」のモデルを構築することができた。「劇場実験」という新たな研究手法が、多様な作品創造のための実験・研究の場として機能することが実証された。

《社会的意義》 芸術系大学が「ラボラトリー機能」の実践を通して、舞台作品の創造現場に積極的に関与することで、社会における作品の創造と発信の場を学術的にサポートする方法論を基礎付けることができた。学術研究と作品創造の場を結びつける社会的機関としての「オープン・ラボラトリー」の有効性が実証された。

研究成果の概要（英文）：This research project focused on the 'Laboratory-function' in the creation process of performing arts. 'Laboratory-function' is defined to be a set of investigative and experimental practices for creating works of performing arts, including theoretical and practical ones. The efficacy of this research model conducted by the university-theatre joint, on which Kyoto University of the Arts has produced many research results, has become clear through a variety of experimentations using Kyoto Art Theatre, which afterwards led to the creation of real art works.

研究分野：能楽研究

キーワード：舞台芸術 演劇 ダンス コンテンポラリーアート パフォーマンス 劇場 アートマネジメント
 ドラマトゥルク

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1)「創造のプロセス」に関する実践的研究の必要性

学術的背景

従来の日本の舞台芸術研究は、「文学研究」の一部としての戯曲研究や作家研究、もしくは舞台化された劇場作品を対象とした上演研究等、《完成された作品》を対象とする研究が主流であり、来たるべき未来の《完成された作品》を目標とする具体的な「創造プロセス」に関わる実践的研究はほとんど行われてこなかった。

作品創造の現状

近現代日本における舞台芸術作品の創造は、これまで国公立や民間の劇場、劇団やダンスカンパニー、伝統芸能諸団体等を中心に担われてきたが、そうした作品創造の諸主体が、とりわけ1990年代以降に依拠してきた公的助成金は、諸外国と比較した場合、到底潤沢とは言いがたい。そのため最新の研究成果や社会動向を踏まえた「創造プロセス」を、中長期的な視座に立って構築する余裕のある劇場や劇団は、ごく少数にとどまってきた。

京都芸術大学(旧称京都造形芸術大学)における研究成果の蓄積

(a) 京都芸術大学は、平成13年度に、日本の高等教育機関としては初めてとなる本格的な劇場施設「京都芸術劇場」を開設し、同時に、学内附置研究機関として「舞台芸術研究センター」を設置した。同研究センターは、文部科学省の大型研究助成金を受け(平成13-25年度)、「京都芸術劇場」を拠点として、舞台芸術における創造と研究が有機的に結びついた、芸術系大学にふさわしい独自の研究活動・方法を実施し、いずれも高い評価を受けてきた。

(b) 上記活動と並行して、同研究センターを母体とした「舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点」が平成25年度に設置され、同年に文部科学省「共同利用・共同研究拠点」の認定を受けた(認定期間:平成25~令和6年度)。この事業では、舞台作品の創造を視野に入れた「劇場を活用した研究」というコンセプトのもとに、芸術家と研究者が共同で研究チームを組むという新しい研究手法による研究プロジェクトを、学内外から募集し、継続的に実施しつつあった。

本研究プロジェクトの立ち上げ

上記の問題を、上記の研究実績をベースに解決するためのビジョンとして、芸術系大学が主体となった日本に独自の「オープン・ラボラトリー」の組織化が構想されることとなった。オープン・ラボラトリーの組織化とは、劇場や劇団等の諸団体と芸術系大学とが、複雑なグローバル社会における芸術的/社会的要請に対応した明確なテーマを定め、相互に自由な立場で協働し、本格的な作品を立ち上げるための、時には複数年に亘る「創造のプロセス」を立ち上げていく「場」の創出である。本研究プロジェクトは、そうした問題意識に基づいて実施されてきた。

2. 研究の目的

本研究は、舞台芸術作品の創造プロセスにおける「ラボラトリー機能」の一般的有効性を、多角的に検証しながら、**芸術系大学における実践的研究モデル**を、舞台芸術研究の分野で構築し、広く社会に発信することを目的として行われてきた。

(1)「ラボラトリー機能」とは何か

「ラボラトリー機能」とは、京都芸術大学「共同利用・共同研究拠点」における設立の支柱である基本コンセプトのひとつである。同研究拠点では、舞台芸術の創造現場一般における「大学の劇場」の役割を、「ファクトリー機能」と「ラボラトリー機能」に分類している。前者が、「大学の劇場」に特有のリソースを活かして《完成された作品》を国内外に発信していく機能を意味しているのに対して、後者は、《完成された作品》を創造するプロセスの構築に焦点をあて、その拡充をはかる機能を指している。

(2)「ラボラトリー機能」のモデル化

「ラボラトリー機能」は、舞台芸術研究の分野における新しい研究対象である。日本国内では京都芸術大学「共同利用・共同研究拠点」が中心となって、具体的な展開が実践されているが、その可能性や社会的意義はきわめて高い。そのため、その研究及び社会的な発信にあたっては、同大学の研究機関や施設の特長性のみに依拠することのない、理論面と実践面双方でのモデル化が不可欠となる。われわれが3年間で明らかにすべき点は、そこに存していた。

3. 研究の方法

「ラボラトリー機能」の構築に関する、理論的検証、実践的モデル化、の作業を並行して行った。前者に関しては、舞台芸術における「アートマネジメント研究」及び「ドラマトゥルク研究」が主たる先行研究として参照され、後者に関しては、将来的な「オープン・ラボラトリー」設置を見据えた3つの主要な「視点」を定め、劇場実験を伴う「創造のプロセス」を実験的に構築しながら、その有効性と課題を具体的に検証した。その上で、と の作業が相互に連携しながら、各年度の成果と課題を踏まえつつ、「創造」と「研究」が有機的に結びついた「ラボラトリー機能」の可能性を、芸術系大学における実践的研究のモデルとして構築してきた。

(1) 理論的な検証と深化

主な先行研究「ラボラトリー機能」における「創造のプロセス」をめぐっては、学術的な先行研究として、舞台芸術における「アートマネジメント研究」と「ドラマトゥルク研究」が参照さ

れた。

「アートマネジメント」の現状調査

現代日本における「創造のプロセス」をめぐる理論的研究は、『公共劇場の 10 年：舞台芸術・演劇の公共をめぐる現在と未来』、『芸術と環境：劇制度・国際交流・文化政策』(2012)をはじめとする伊藤裕夫、藤井慎太郎、藤野一夫、小林真理等の研究がすでに蓄積されつつあった。こうした諸研究をベースに、本研究プロジェクトにおいては、京都芸術大学舞台芸術研究センターの 3 名のプロデューサー、及び本研究プロジェクトのための雇用した 2 名の研究補助職員を中心として、国内外の重要な劇場、文化施設、国際舞台芸術祭、大学等の現地調査(フィールドワーク)を 3 年間で 24 箇所実施した。

- 大学(1): 韓国総合芸術大学校(韓国・ソウル)
- 劇場作品(4): サウンドプラットフォームパフォーマンス(日本・名古屋)、平田オリザ演劇展 vol.6(日本・東京)、日本・タイ国際共同製作作品『ブラータナー』(日本・東京)、地域滞在製作作品『Pamiliya』(日本・福岡)
- 文化施設(5): 山口情報芸術センター(日本・山口)、城崎国際アートセンター(日本・豊岡)、プリティッシュ・カウンスル(日本・東京)、国立劇場おきなわ(日本・那覇)、彩の国さいたま芸術劇場(日本・与野)
- 国際舞台芸術祭(10): フェスティバルノトーキョー2017(日本・東京)、TPAM 国際舞台芸術ミーティング in 横浜 2017(日本・横浜)、同 2018(同)、同 2019(同)、シアターコモンズ 2018(日本・東京)、あいちトリエンナーレ 2019(日本・名古屋他)、Festival d'Automne à Paris 2017(フランス・パリ)、PuSh International Performing Arts Festival 2017(カナダ・バンクーバー)、Sydney Festival 2017(豪州・シドニー)、Festival International de Théâtre de la Sibiu(ルーマニア・シビウ)
- その他(4): 全国小劇場ネットワーク会議 2018(日本・横浜)、同 2019(同)、Asia Producer's Platform Camp 2018(インドネシア・ジャカルタ/ジョグジャカルタ)、同 2019(香港・マカオ・中国(広州))

ドラマトゥルク研究

「ドラマトゥルク」は、主として欧米の公共劇場で発展してきた舞台芸術作品の「創造プロセス」を根幹的に支えるきわめてユニークな制度であるが、本研究プロジェクトでは、近年この領域に関する主要な先行研究である平田栄一郎『ドラマトゥルク：舞台芸術を進化/深化させる者』(2010)等を基本文献としつつ、特に日本国内における現状を集中的にリサーチする「ドラマトゥルク研究部会」を設置し、3 年間に亘る研究調査を継続的に実施した。急速に進展しつつあった、その成果の公開の場として、最終年度に公開シンポジウム「ドラマトゥルクをめぐるシンポジウム 「創造のプロセス」の未来」(2019 年 6 月)、及び公開国際シンポジウム「ドラマトゥルギー・リサーチ：鄭成功研究/演劇を通して考える日台中交流史」(同年 12 月)を実施した。前者は、機関誌『舞台芸術』23 号(京都芸術大学舞台芸術研究センター編集・発行、2020 年 3 月刊行)で、後者は同名の研究報告冊子(24 頁、フルカラー版)を作成し、刊行した。

(2) 実践的なモデル化

モデル化の出発点

京都芸術大学「共同利用・共同研究拠点」が、平成 25 - 28 年度にかけて行ってきた「ラボラトリー機能」に関する萌芽的研究は、研究者と芸術家が共同研究グループを組織し、「京都芸術劇場」を活用した「劇場実験」を中心とする実践的な研究活動を通じて「創造のプロセス」を構築していく点に特色があった。本研究も、同様の研究方法を採用した。

モデル化のための(視点)の設定

上記をベースとしつつ、本研究では、「伝統」「身体」「テクノロジー」という 3 つの主要な《視点》を設定し、それぞれの《視点》を相互に関連づけながら、3 年間に亘って複数の「創造プロセス」を実験的に立ち上げ、それらを理論的・実践的に繰り返し検証する、という方法を採用した。

「劇場実験」の実施

京都芸術大学は、伝統演劇から現代演劇・舞踊、さらには最先端のマルチメディアシアターまで含めたプロフェッショナルな舞台芸術作品の上演が可能な、日本で唯一の本格的な劇場施設である「京都芸術劇場」(大劇場=春秋座(客席数約 800 名)、小劇場=studio21(客席数最大約 130 名))を所有している。同劇場は、年間を通じて、数多くの舞台芸術作品の創造や発信を実施しているが、本研究は、同劇場を「ラボラトリー機能」として活用する同大学「共同利用・共同研究拠点」の成果の一部を発展的に継承しようとするものであるが、そこで立ち上げられた新しい研究手法としての「劇場実験」を中心的な方法とし、3 年間で 7 件の「劇場実験」(公開・非公開とも)を実施した。なお、こうした「劇場実験」は、上記《3 つの視点》のうちの 2 つないし 3 つの視点にかかわる複合領域の実験としてなされた。

(3) 研究体制(役割分担)

研究代表者である天野文雄は、本研究全体の統括を行いつつ、田口章子(研究分担者)と協働して、《視点 1:「伝統」》の主幹を務めた。

研究分担者である森山直人は、天野の研究統括を補佐しつつ、研究分担者の内野儀、やなぎみわと協働して《視点2：「身体」》、及び研究分担者の岩村原太と協働して、《視点3：「テクノロジー」》の主幹を務めた。

各主幹は、総計**43**名の国内外のアーティスト（舞台技術者、舞台制作者を含む）研究者に本研究プロジェクトの「研究協力者」としての協力を得て、**13**件に亘る個別の研究グループを組織し、研究を進めていった。また、研究を効率的に進めていくために、舞台芸術及び現代芸術の実践現場にも精通した**2**名の研究補助職員を雇用し、研究体制の実効化を促進した。

研究の実践にあたっては、京都芸術大学・舞台芸術研究センター、及び同大学「共同利用・共同研究拠点」の研究活動と密接にリンクしつつ、同大学「京都芸術劇場」を活用しながら行われた。

4. 研究成果

本研究が構想する「オープン・ラボラトリー」の社会機能を図示すると、以下のようになる。

(A) 作品の構想・テーマ設定 国内外の芸術家・団体・施設	(B) 創造のプロセス・実験 オープン・ラボラトリー (ラボラトリー機能)	(C) 本格的な作品化 国内外の芸術家・団体・施設
--	---	--

すなわち、(A) 国内外の芸術家や芸術団体、文化施設等で、新しい舞台芸術作品の初期構想・テーマ設定などがなされる、(B) 国内外の芸術家や芸術団体、文化施設等は、「オープン・ラボラトリー」と協働しながら、作品の構想・テーマ等に基づいた調査・劇場実験を実施する、(C) そこでの調査・実験（トライ・アンド・エラー）の成果に基づいて、国内外の芸術家・団体・施設はそれぞれの拠点に戻って、本格的な作品化に着手し、発表する、という一連の流れとなる。

それを前提とした上で、本研究の目的である、「ラボラトリー機能」を中核とした**芸術系大学における実践的研究モデルの構築**に照合したとき、本研究における研究成果は、以下のような評価軸で検証することができる。

- (1) 「ラボラトリー機能」が、類似の機能と比較してどのような独自性を持ちうるのか。また、同機能を組織化する上での有効な「研究軸」とは何か。「ラボラトリー機能」が機能するために必要なリソースとは何か。
- (2) 「ラボラトリー機能」という視点にける国内外とのネットワークの形成は可能か。それはどの程度の広がりを持ちうるか。
- (3) 「ラボラトリー機能」における研究・実験（＝上記**B**）が、本格的な舞台芸術の作品化に繋がる有効性を持ちうるのか。

上記(1)～(3)の点について、本研究の成果は以下の通りであった。研究成果の全体を通じて、芸術系大学における「ラボラトリー機能」の研究モデル化とその有効性が実証され、オープン・ラボラトリーの芸術実践上の可能性が明らかになった。

(1) 理論的側面における研究成果

舞台芸術のアートマネジメントを先行研究・先行事例に関する現地調査（3年間で24件）ドラマトゥルクの先行研究・先行事例の調査と、それに基づいて実施した公開シンポジウムを通じて、「オープン・ラボラトリー」が、従来「創造のプロセス」に密接にかかわってきた「アートマネジメント」「ドラマトゥルク」と共通する機能を持ち合わせつつ、同時にそのどちらにも還元できない独自性を持ちうるものであることが明らかになった。とりわけ、上記の公開シンポジウムでは、日本の現代演劇の代表的なドラマトゥルクである長島確氏、滝口健氏との議論を通じて、ドラマトゥルクが、すでに立ち上げられている作品製作チームを前提とし、その内部で創造に側面から関与する職能であるのに対して、「オープン・ラボラトリー」は、作品製作チーム自体の立ち上げと組織化に関与しうることを明らかにすることができた。また、そこでの研究成果の一部を、機関誌『舞台芸術』23号を通じて広く公開することができた。

に関連する事柄として、京都芸術大学舞台芸術研究センターと連携しながら実施された「鄭成功研究／演劇を通して考える日台中交流史」においては、個人としてのドラマトゥルクではなく、一種のドラマトゥルク・チームを一から立ち上げ、**3**年間継続で「創造のプロセス」の構築を実験的に行うことができた。の結論は、この個別研究の成果によっても実証され、そこでの研究成果を、**3**年目の国際シンポジウムで一般に公開することができたことも大きな収穫であった。

「ラボラトリー機能を組織化する上での有効な「研究軸」として、「伝統」「身体」「テクノロジー」という3つの主要な《視点》は、有効に機能することが明らかになった。同時にまた、「オープン・ラボラトリー」の基軸となりうる具体的なテーマとして、「サミュエル・ベケット」「ポール・クローデル」「アニメと日本の伝統文化」という**3**種類を設定したが、結果として、それぞれのテーマ内における成果だけでなく、「オープン・ラボラトリー」という場全体に波及する広がりを持ちうることも明らかにすることができた。特にベケットに関しては、これまで手

付かずだった「映像化されたベケット」の主な作品に日本語字幕を付け、「映画祭」という形で上映するという手法が、これまでベケット作品にアクセスできなかった若手の舞台芸術作家、現代美術家に大きな反響をよんだことも大きな成果であった。この「映画祭」は、京都芸術大学舞台芸術研究センター主催で開催され、今後何度でも上映会を開催できる準備が整っている。「芸術系大学」の貢献の方法という点でも重要な事例となった。

(2) 実践的側面における研究成果——研究ネットワーク

「ラボラトリー機能」及びその具体的手法としての「劇場実験」という視点において、国内の芸術家、芸術団体、文化施設等との広範で、実効性のあるネットワークを構築することができた。3年間にわたる本研究に参加した43名の研究協力者のなかには、国内の舞台演出家・俳優15名、舞台技術者6名、舞台プロデューサー・ドラマトウルク8名、舞台芸術研究者・批評家12名の参加を得ることができた。また、京都芸術大学舞台芸術研究センター、同大学共同利用・共同研究拠点以外に6団体と、研究プロジェクトの組織化をとまなう研究連携を行うことができた。

大学(1): 京都工業繊維大学(東善之研究室)、芸術団体(4): ティーフクトリー、日本舞台美術家協会、NPO法人芸術公社、公益財団法人セゾン文化財団、文化施設(1): SPAC 静岡舞台芸術センター、

と同様の視点において、今後の本格的な「オープン・ラボラトリー構想」のコアとなる国外の芸術家と継続的なネットワークを構築することができた。台湾・日本の国際的演劇プロデューサーの新田幸生、イタリア・ローマ在住の演出家・批評家の多木陽介、インドの現代演劇を牽引する劇団シアター・ルーツ&ウィングス(シャンカル・ヴェンカテシュワラン(演出家)、鶴留聡子(プロデューサー))とは研究プロジェクト実施の前後を含め、京都と継続的な連携を結ぶことに繋がり、ルーマニア・シビウ演劇祭とは、具体的な研究連携が進行しつつある。

【今後の課題】国際的なネットワークのさらなる拡大が可能であり、令和2年度より、「アジア圏」にフォーカスした新たな研究を立ち上げている。

(3) 実践的側面における研究成果——劇場実験とその成果

3年間を通じて、6件の劇場実験を実施することができた。2017年度には、前年度に京都芸術劇場で世界初演されたマルチメディア型演劇『繻子の靴』(渡邊守章翻訳・演出)の再演を想定した実験、国際的な舞踊家・山田せつ子を研究代表者とする「ダンスの創造的行為をめぐる」における特殊な実験舞台の芸術的効果の探究、「サミュエル・ベケットを展示する」における劇場ロビーの創造的使用の探究がそれぞれ行われた。2018年度には、「モバイルシアタープロジェクト」において、劇作家ハイナー・ミュラーのテキストに基づくユニークなロボット演劇の実験が実施され、同時にまた、「インド/京都による国際共同研究」において、日本であまり知られていない現代インド演劇作品の実験上演が実施され、「アジアの大学における演劇教育」においては演劇教育の世界的第一人者オーブリー・メロー氏との共同実験が企画された(西日本豪雨のため実験は中止)。2019年度には、「ブラハ・カドリエンナーレ展典のための研究実験」においては、日本の舞台美術史を、国際舞台美術展に出展するための劇場的方法論の探究が、『4』上演の可能性を巡る劇場実験においては、マルチメディアを活用した台詞劇の新たな上演方法の探究が、それぞれ行われた。比較的短期間に、非常に多様な劇場実験を行うことができたことで、「オープン・ラボラトリー」が幅広い要請に対応可能なことが実証された。

上記の劇場実験7本において、個別の研究プロジェクト終了後に、その研究成果をベースにした本格的な舞台作品が6本企画され、5本が実現された(残りの1本はコロナ禍のため2021年度に延期)。このことにより、「オープン・ラボラトリー」における研究手法が、実際の舞台芸術作品の創造に直接結びつく有効性を持つことが明らかになったと言える。

「劇場実験」の研究成果がベースとなり実現した舞台芸術作品は、以下の通りである。

(i) マルチメディア型演劇作品『繻子の靴』(再演版): 渡邊守章翻訳・演出、高谷史郎・映像、服部基・照明/静岡芸術劇場、2018年6月。

() ダンス作品『破壊の子ら』(世界初演): 山田せつ子企画、筒井潤・演出/京都芸術劇場・春秋座、2018年11月。

() ライブ・パフォーマンス『MM』(世界初演): やなぎみわ構成・演出/2019年2月-2020年2月、高松市美術館、アーツ前橋、福島県立美術館、神奈川県民ホールギャラリー、静岡県立美術館。

() 演劇作品『インディアン・ロープ・トリック』(世界初演): シャンカル・ヴェンカテシュワラン作・演出/2020年2月、京都芸術劇場・春秋座、リーブラホール。

() 展示作品「日本ブース」、日本舞台美術協会作品/2019年6月、ブラハ・カドリエンナーレ展。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計43件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 3件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 140
2. 論文標題 「休息」という型の来歴	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大槻能楽堂会報『おもて』	6. 最初と最後の頁 5-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 141
2. 論文標題 『志賀忠度』の作者は禅竹なるべし	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大槻能楽堂会報『おもて』	6. 最初と最後の頁 4-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 142
2. 論文標題 風流(狂言風流)の歴史と『大黒の風流』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大槻能楽堂会報『おもて』	6. 最初と最後の頁 9-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 143
2. 論文標題 昭和十年の大槻能楽堂落成と当時の大阪能楽界	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大槻能楽堂会報『おもて』	6. 最初と最後の頁 3-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 87(2)
2. 論文標題 観世流と能楽堂の歩みー近現代大阪の能舞台と能楽堂(前編)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『観世』	6. 最初と最後の頁 40-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 87(1)
2. 論文標題 観世流と能楽堂の歩みー近現代大阪の能舞台と能楽堂(後編)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『観世』	6. 最初と最後の頁 41-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 439
2. 論文標題 「岩船」の原形にさかのぼる	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『国立能楽堂』	6. 最初と最後の頁 22-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 23
2. 論文標題 世阿弥再見ー「改作」をめぐる世阿弥の功業	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『舞台芸術』	6. 最初と最後の頁 125-140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 やなぎみわ	4. 巻 117
2. 論文標題 生者と死者のあわい : 『暗い林を抜けて』をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『新潮』	6. 最初と最後の頁 161-174
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森山直人	4. 巻 23
2. 論文標題 「演劇的」への転回 : 舞台演劇の時代の「批評」に向けて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『舞台芸術』	6. 最初と最後の頁 141-148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内野儀	4. 巻 23
2. 論文標題 豊島重之のために : 絶対演劇とその時代 (特集 豊島重之追悼 : モレキュラーシアターの軌跡)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『舞台芸術』	6. 最初と最後の頁 91-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内野儀	4. 巻 なし
2. 論文標題 「インターカルチュラルリズム」と「国際共同制作」 『ブラータナー』を正しく歴史的に理解するために	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『憑依のバンコク、オレンジブック』	6. 最初と最後の頁 113-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 内野儀	4. 巻 116
2. 論文標題 観葉植物はセックスをするか 岡田利規『NO SEX』をミュンヘンで観る	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『新潮』	6. 最初と最後の頁 228-229
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内野儀	4. 巻 なし
2. 論文標題 イベント主義から遠く離れて 「響きあうアジア2019」のいくつかの企画について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国際交流基金アジアセンター『アジアハンドレッズ』	6. 最初と最後の頁 1-1
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 内野儀	4. 巻 4
2. 論文標題 脱領土化/再領土化から 破片 的へ あるいは、10年代の上演系芸術を俯瞰する(3)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『ASSEMBLY』	6. 最初と最後の頁 48-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内野儀	4. 巻 2020
2. 論文標題 岡田利規の時代 2010年代の舞台芸術	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『国際演劇年鑑』	6. 最初と最後の頁 238-245
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 UCHINO, Tadashi	4. 巻 Special Issue
2. 論文標題 From Noh to Sh_gekij_	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『American Theater』	6. 最初と最後の頁 1-1
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 125
2. 論文標題 論文標題 文禄二年結城少将宛観世座配当米割付状	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『観世』	6. 最初と最後の頁 1-1
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 22
2. 論文標題 能の舞台と演技 : 鏡板の出現がもたらしたもの	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 舞台芸術	6. 最初と最後の頁 163-170
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 11
2. 論文標題 特集 音阿弥・生誕六二〇年 応永三十三年の「観世三郎」の勸進猿楽をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 観世	6. 最初と最後の頁 24-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 35
2. 論文標題 変化し続けてきた能 : その諸相 (特集 能と伝統 : 時代を超えた継承の本質をさぐる)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 民族芸術	6. 最初と最後の頁 26-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 63
2. 論文標題 「二人の三郎」からみた室町時代「能作」史 : 世阿弥と音阿弥の芸風と芸道理念から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中世文学	6. 最初と最後の頁 48-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 422
2. 論文標題 二つの『竹生島』女体とその来歴	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 月刊国立能楽堂	6. 最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 158
2. 論文標題 足利義政下賜観世家旧蔵の千鳥の面箱について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大槻能楽堂会報『おもて』	6. 最初と最後の頁 pp5-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 678
2. 論文標題 観世流の『国栖』の詞章とその来歴	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 鏡仙	6. 最初と最後の頁 5-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 687
2. 論文標題 『張良』の「沓」の演出について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 鏡仙	6. 最初と最後の頁 5-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 139
2. 論文標題 『申楽談義』十八条の『鐘の能』について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大槻能楽堂会報『おもて』	6. 最初と最後の頁 5-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 137
2. 論文標題 「護法型再考」補遺	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大槻能楽堂会報『おもて』	6. 最初と最後の頁 5-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内野儀	4. 巻 19
2. 論文標題 ツアー・パフォーマンスの上演における「劇場」と「観客」についての考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 境界を越えて：比較文明学の現在：立教比較文明学会紀要	6. 最初と最後の頁 120-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内野儀	4. 巻 61
2. 論文標題 詩 は到来するか? : ドラマとフォーマリズムの現在	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代詩手帖	6. 最初と最後の頁 10-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森山直人	4. 巻 22
2. 論文標題 「日本現代演劇史」という「実験」 - 批評的素描の試み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 舞台芸術	6. 最初と最後の頁 171-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yoshiyuki HIGASHI	4. 巻 3
2. 論文標題 Attitude Control Simulation of a Legged Aerial Vehicle Using the Leg Motions	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Advances in Science, Technology and Engineering Systems Journal	6. 最初と最後の頁 204-212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.25046/aj030627	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 第65号
2. 論文標題 大蔵虎明と萩原兼従	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 武蔵野文学	6. 最初と最後の頁 13-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 21号
2. 論文標題 近代日本の能楽観(その三) 「能の美」ということをめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 舞台芸術	6. 最初と最後の頁 167-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 672号
2. 論文標題 『殺生石』と源翁禅師の事績	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 鏡仙	6. 最初と最後の頁 3-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 136号
2. 論文標題 《三輪》の「作意」、その総合的な把握	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大槻能楽堂会報『おもて』	6. 最初と最後の頁 7-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 135号
2. 論文標題 《源氏供養》の紫式部はなぜ烏帽子を着けているのか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大槻能楽堂会報『おもて』	6. 最初と最後の頁 9-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 716号
2. 論文標題 「白髭の曲舞」と能『白髭』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 京都観世会館会報『能』	6. 最初と最後の頁 7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 15号
2. 論文標題 弘治三年の駿府の「観世大夫」は宗節か 戦国期における観世座の地方下向望見	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 能と狂言	6. 最初と最後の頁 127-134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 133号
2. 論文標題 《葵上》における生霊御息所の描かれ方	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 大槻能楽堂会報『おもて』	6. 最初と最後の頁 7-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天野文雄	4. 巻 134号
2. 論文標題 《経正》の作者について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 大槻能楽堂会報『おもて』	6. 最初と最後の頁 7-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内野儀	4. 巻 115巻3号
2. 論文標題 観光客の演劇 神里雄大の時代	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 新潮	6. 最初と最後の頁 217-223
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森山直人	4. 巻 21号
2. 論文標題 演劇という「画面」 - 太田省吾、平田オリザ、岡田利規を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 舞台芸術	6. 最初と最後の頁 160-166
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 天野文雄
2. 発表標題 能を観るヒント
3. 学会等名 国際伝統芸術研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 天野文雄
2. 発表標題 春日興福寺における能上演の時と場 その概観
3. 学会等名 能楽学会世阿弥忌セミナー
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Uchino Tadashi
2. 発表標題 Theatre as Assembly: Radical Dramaturgy in “Theatre Commons”
3. 学会等名 Contemporary Japanese Theatre Workshop, German Institute for Japanese Studies Tokyo (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内野儀
2. 発表標題 Sam Shepardの「晩年のスタイル」を検討する」
3. 学会等名 日本アメリカ文学会第58回全国大会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 天野文雄
2. 発表標題 変化し続けてきた能 その諸相
3. 学会等名 民族芸術学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森山直人
2. 発表標題 「日本現代演劇史」という「実験」（招待講演、国際学会）
3. 学会等名 上海文化広場（中国語翻訳）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 東善之
2. 発表標題 歩行リハビリテーションのための6軸姿勢角センサを利用した装着型歩行支援ロボットの開発
3. 学会等名 一般社団法人 システム制御情報学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 東善之
2. 発表標題 構造物検査用飛行ロボットのための吸着機構の研究
3. 学会等名 一般社団法人 日本機械学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Higashi Yoshiyuki
2. 発表標題 Design and Simulation of a Control System for a Quadcopter with a Safety Harness
3. 学会等名 Proceedings of TENCON 2018 - 2018 IEEE Region 10 Conference（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Uchino Tadashi
2. 発表標題 Theatre of the Tourist in the Age of Mobility: Kamisato Yudai and Choy Ka Fai (revised) (招待講演・国際学会)
3. 学会等名 第20回台北芸術祭(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 天野文雄
2. 発表標題 「二人の三郎」からみた室町期「能作」史の試み
3. 学会等名 中世文学会秋季大会(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 天野文雄
2. 発表標題 能楽研究の現況と課題 『風姿花伝』奥義の意味とそれをめぐる問題をめぐって
3. 学会等名 公開研究会「古典芸能研究の横断と総合」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Uchino Tadashi
2. 発表標題 An Introduction to “The Theater and the Theatrical: Reconsidering American “Drama” in the Age of Trump.”
3. 学会等名 アメリカ学会第 51 回年次大会プログラム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Uchino Tadashi
2. 発表標題 Theatre of the Tourist in the Age of Mobility: Kamisato Yudai and Choy Ka Fai,
3. 学会等名 Donald Keene Center for Japanese Culture (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 天野文雄	4. 発行年 2019年
2. 出版社 KADOKAWA	5. 総ページ数 448
3. 書名 能楽手帖	

1. 著者名 やなぎみわ	4. 発行年 2019年
2. 出版社 羽鳥書店	5. 総ページ数 125
3. 書名 神話機械	

1. 著者名 田口章子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 新典社	5. 総ページ数 222
3. 書名 歌舞伎を知られば日本がわかる	

1. 著者名 秋原良 浦田千尋 Peter W. Wilson 藤本信貴 桑原純平 神原貴樹 小方聡 大保忠司 能見基彦 山中拓己 福井智宏 森西晃嗣 伊藤慎一郎 米澤翔 新谷充弘 山盛直樹 松田雅之 稲田孝明 小塩和弥 田和貴純 石川将次 長谷川洋介 中山雅敬 麓耕二 松本光央 射場大輔 本宮潤一 柄谷肇 東善之	4. 発行年 2018年
2. 出版社 シーエムシー出版	5. 総ページ数 272
3. 書名 生物の優れた機能から着想を得た新しいものづくり バイオミメティクスからの発展 第5編 第2章 Clap and Flingを利用した羽ばたき翼型飛行ロボットの開発について	

1. 著者名 毛利三彌・天野文雄	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 272
3. 書名 東アジア古典演劇の伝統と近代	

1. 著者名 天野文雄	4. 発行年 2017年
2. 出版社 KADOKAWA	5. 総ページ数 384
3. 書名 能楽名作選(上)	

1. 著者名 天野文雄	4. 発行年 2017年
2. 出版社 KADOKAWA	5. 総ページ数 392
3. 書名 能楽名作選(下)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>舞台芸術研究センターについて（京都芸術劇場公式ウェブサイト内） http://k-pac.org/?page_id=228 京都造形芸術大学 共同利用・共同研究拠点 公式ウェブサイト http://www.k-pac.org/kyoten/ 京都芸術劇場 春秋座 studio21 公式ウェブサイト http://k-pac.org/ 舞台芸術研究センターについて（京都芸術劇場公式ウェブサイト内） http://k-pac.org/?page_id=228 共同利用・共同研究拠点 公式ウェブサイト http://www.k-pac.org/kyoten/ 京都芸術劇場 春秋座 studio21 公式ウェブサイト http://k-pac.org/</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	柳 美和 (やなぎみわ) (Yanagi Miwa) (10441362)	京都造形芸術大学・芸術学部・客員教授 (34319)	
研究分担者	森山 直人 (Moriyama Naoto) (20343668)	京都造形芸術大学・芸術学部・教授 (34319)	
研究分担者	内野 儀 (Uchino Tadashi) (40168711)	学習院女子大学・国際文化交流学部・教授 (32699)	
研究分担者	岩村 原太 (Iwamura Genta) (50794822)	京都造形芸術大学・芸術学部・教授 (34319)	
研究分担者	田口 章子 (Taguchi Akiko) (80340529)	京都造形芸術大学・芸術学部・教授 (34319)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	東 善之 (Higashi Yoshiyuki) (70585760)	京都工芸繊維大学・機械工学系・助教 (14303)	
研究 協力者	吾郷 賢 (Ago Satoshi)		
研究 協力者	安藤 朋子 (Ando Tomoko)		
研究 協力者	岡室 美奈子 (Okamuro Minako)		
研究 協力者	奥村 朋代 (Okumura Akiyo)		
研究 協力者	小坂部 恵次 (Osakabe Keiji)		
研究 協力者	小崎 哲哉 (Ozaki Tetsuya)		
研究 協力者	葛西 健一 (Kasai Kenichi)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	金氏 徹平 (Kaneuji Teppei)		
研究協力者	観世 喜正 (Kanze Yoshimasa)		
研究協力者	シャンカル ヴェンカーテシュワラン (Sankar Venkateswaran)		
研究協力者	杉山 至 (Sugiyama Itaru)		
研究協力者	諏訪 春雄 (Suwa Haruo)		
研究協力者	高橋 宏幸 (Takahashi Hiroyuki)		
研究協力者	多木 陽介 (Taki Yousuke)		
研究協力者	滝口 健 (Takahuchi Ken)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	田村 友一郎 (Tamura Yuichiro)		
研究協力者	鶴留 聡子 (Tsurudome Satoko)		
研究協力者	内藤 久義 (Naito Hisayoshi)		
研究協力者	長澤 慶太 (Nagasawa Keita)		
研究協力者	中島 那奈子 (Nakajima Nanako)		
研究協力者	長島 確 (Nagashima Kaku)		
研究協力者	永田 靖 (Nagata Yasushi)		
研究協力者	新里 直之 (Niisato Naoyuki)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	西原 多朱 (Nishihara Tazu)		
研究協力者	新田 幸生 (Nitta Yukio)		
研究協力者	野澤 美希 (Nozawa Miki)		
研究協力者	浜畑 賢吉 (Hamahata Kenkichi)		
研究協力者	原口 佳子 (Haraguchi Yoshiko)		
研究協力者	久野 敦子 (Hisano Atsuko)		
研究協力者	藤田 康城 (Fujita Yasuki)		
研究協力者	星野 太 (Hoshino Futoshi)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	三浦 基 (Miura Motoi)		
研究協力者	山田 せつ子 (Yamada Setsuko)		
研究協力者	渡邊 守章 (Watanabe Moriaki)		
研究協力者	ワン チョン (Wang Chong)		
研究協力者	オーブリー メロー (Aubrey Mellor)		
研究協力者	川口 典成 (Kawaguch Norishige)		
研究協力者	池田 智之 (Ikeda Toshiyuki)		
研究協力者	平井 愛子 (Hirai Aiko)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	川村 毅 (Kawamura Takeshi)		
研究協力者	川原 美保 (Kawahara Miho)		
研究協力者	井出 亮 (Ide Ryo)		
研究協力者	竹宮 華美 (Takemiya Hanabi)		